

等位接続の統語構造について

三笥, 正寛
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6789513>

出版情報 : 九大英文学. 44, pp.157-170, 2001-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



等位接続の統語構造について

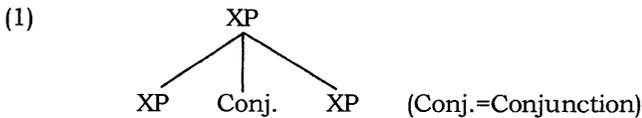
三苦 正寛

1. はじめに

等位接続とは等位接続詞を用いて複数の要素を結びつける現象であり、このようにしてできる構造のことを等位構造と呼ぶ。従来、等位接続については統語論・意味論双方の側面から分析されることが多く、特に「等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint, CSC)」に関しては、Lakoff (1986)に代表されるように、統語的な制約としては存在しないとする提案さえある。本稿では、等位接続の統語構造として提案されたものを再吟味し、どのような構造が妥当であるかを検証していくと同時に、統語制約として出された CSC をどのように位置づけるべきであるかを論じる。

2. どのような構造が提案されてきたか

等位接続の統語構造として、統率・束縛理論(GB 理論)までの生成文法理論では以下のような「平らな」構造が想定されていた。¹



この構造は、等位接続という現象の本質をうまく捉えることができるものであったが、近年の Minimalist Program (MP)に基づく研究では、経験的にも理論的にも支持されていない。このように3つ以上の枝分かれができる構造は MP では認められておらず、また、3章で考察する事例から等位項の非対称性が考慮されるようになると、(1)の構造をもって捉えることができなくなる。そこで、等位接続の統語構造を捉え直す数々の代案が提起されている。本章では、このような代案として代表的な Munn (1993)と Johannessen

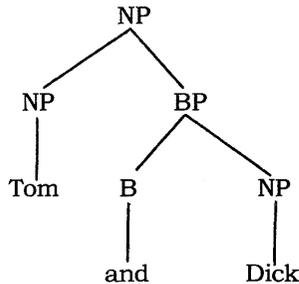
(1998)に言及し、それぞれの分析を考察したうえで 3、3 章で現象を取り上げながら問題点を考察していく。

2.1. Munn の分析

Munn (1993)は、等位接続詞と第 2 等位項からなる句表現が第 1 等位項に付加しているという *Adjoined BP structure* を提案している。具体例を見よう。(ここで BP とあるのは *Boolean Phrase* のことで、*and*, *or*, *but* のようなブール演算子(B)を主要部とする句である。)

(2) a. Tom and Dick

b.

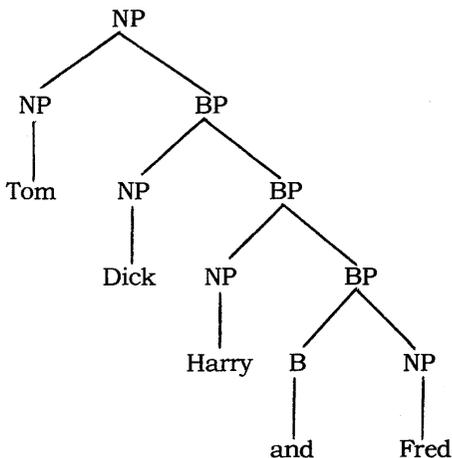


等位項が 3 つ以上になる場合には以下のような構造になる。

(3) a. Tom, Dick, Harry and Fred

(Munn (1993:24))

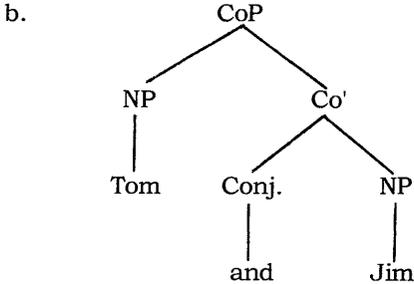
b.



2.2. Johannessen の分析

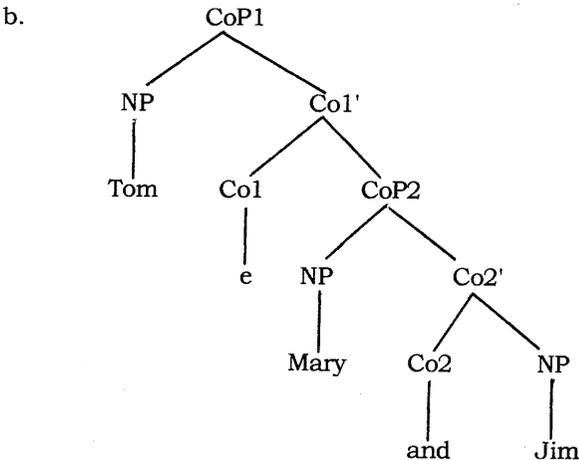
Munn に対して、Johannessen (1998)は、(4)にみるように等位接続詞を主要部とし、第 1 等位項・第 2 等位項をそれぞれ指定部・補部とする Conjunction Phrase (CoP)を想定し、その補部に繰り返し Conjunction Phrase が生起する構造を提案している。

(4) a. Tom and Jim (Progovac (1998:115))



等位項が 3 つ以上になると以下のような構造になる。

(5) a. Tom, Mary and Jim (ibid.: 116))



3. 諸現象の考察

本章では、2 章で述べた Munn と Johannessen の提案を議論の中心とし

て、等位接続の構造を規定するうえで考察すべき現象をとりあげる。本稿では、異なる範疇の等位接続 (3.1.節)、 ϕ 素性の一致 (3.2.節)、そして外置 (3.3.節) を取り扱う。

3.1. 異なる範疇の等位接続

異なる範疇が等位接続される例として、(6)のような文が挙げられる。(1)の構造からは、同範疇しか等位接続できず、これらの文は排除されることを予測するが、実際には(6b)のように文法的な文もある。

(6) a. *The scene [_{PP}of the movie] and [_{CP}that I wrote] was in Chicago.
(Chomsky (1957: 36))

b. We talked about [_{DP}Mr. Colson] and [_{CP}that he had worked at the White House].
(Munn (1993: 80))

この件に関して、Quirk et al. (1985)は等位項間の意味的な平行性に着目し、これが保たれていれば異なる範疇の等位接続が可能になるとしている。また、稲田 (1988)は、「異なる範疇の等位接続が可能になるのは、等位項が共通の意味機能を共有しうる場合である。」と論じている。⁴したがって、(7)のように、等位項間の意味的な平行性の制約を規定することができる。

(7) 等位項間の「意味的な平行性」

等位構造においては、すべての等位項が意味機能を共有していなければならない。

異なる範疇の等位接続のさらなる特徴として、(6b)の第2等位項だけを取り出した文には、(8)のように容認不可能となることが挙げられる。

(8) *We talked about that he had worked at the White House.

では、このような異なる範疇の等位接続は、どのような構造で捉えるのがよいだろうか。結論から言えば、Munnの分析に則って構造を捉えるのが望ましいといえる。(6b)(8)の事実から、彼の Adjoined BP structure では、主要部である第1等位項のみが認可されるという事実をうまく説明することができる。andと第2等位項からなるBPは付加詞であるから、意味機能を共有するなどの条件を満たしていれば、統語的に必ずしも認可される必要はなく、この事実は付加構造をとることでもうまく説明することができる。

では Johannessen の分析ではどうなるであろうか。彼女が想定する構造は一種の指定部・主要部関係であり、等位接続詞を主要部とする構造においては等位構造全体が一まとまりとして認可されることを予測してしまい、事実として第 1 等位項のみが認可されるということを説明することができず、結果として彼女の提案は異なる範疇の等位接続を説明する構造としては妥当ではない。

3.2. ϕ 素性の一致(agreement)

ϕ 素性とは、単語、すなわち語彙項目がもつ性・数・人称に関する素性のことである。統語操作においては、主語のもつ ϕ 素性と動詞に含まれる ϕ 素性が一致する必要がある。英語では、there 構文にすると第 1 等位項のみと ϕ 素性が一致する現象が見られる。(9)-(10)の例文は Munn (1993: 94-95)による。)

(9) There is/*are a man and a woman in the garden.

(10) There is/*are a man and three women in the garden.

(9)-(10)の実例をうまく考察することができるのも Munn の構造である。there 構文においては、主要部である第 1 等位項のみが ϕ 素性をもち、付加詞の一部をなす第 2 等位項はもたないと考えることで、(9)-(10)の実例を説明することができる。

一方 Johannessen の構造では、第 1 等位項は主要部である and の指定部として機能するため、等位構造全体の CoP が 1 つの ϕ 素性をもつということになり、その結果第 1 等位項だけを取り出して動詞と ϕ 素性を一致させることは認められない。

3.3. 外置

外置(extraposition)の現象について、以下の(11)のような実例がある。

(11) a. John read [NP₁a book] [BP[Band] [NP₂the newspapers]] yesterday.

b. John read [NP₁a book] [tBP] yesterday, [BP[Band] [NP₂the newspapers]].

c. *John read [tNP₁] [BP[tB] [NP₂the newspapers]] yesterday, [NP₁a

book] [band].

Munn の分析ではこの現象もうまく捉えることができる。彼の提案では BP が 1 つの構成素をなし、かつ最大投射であるから、(11b)のように、BP を外置することは可能であるが、(11c)では NP1 と and は最大投射をなさないため外置することはできない。これに対し、and を主要部とする指定部・主要部関係を提案する Johannessen によると、and と第 2 等位項が最大投射をなすと考えることができないため、(11b)の文法性を説明することができない。

4. 等位構造制約に関する諸問題

4.1. 等位構造制約とは

本章では、等位構造制約(CSC)にかかわる数々の問題を考察していくことにする。CSC とは、Ross (1967/1986)が提案する「島の制約」の 1 つに数えられるもので、以下の(12)に述べられるものである。

(12) In a coordinate structure, no conjunct may be moved, nor may any element contained in a conjunct be moved out of that conjunct. (Ross 1986: 98-99)

つまり、等位項そのものを抜き出して移動させてはならず 5、また等位項に含まれるいかなる要素も抜き出して移動させてはならない、という制約である。具体的には以下のような例で説明することができる。

(13) a. *What sofa will he put the chair between some table and t? (ibid.: (2.18))

b. *The lute which Henry plays t and sings madrigals is warped. (ibid.: (4.82a))

(13a)は what sofa の wh 移動によって等位項そのものを抜き出した例で、(13b)は関係節において第 1 等位項の VP 補部(すなわち等位項に含まれる一部の要素)から the lute を抜き出した例である。いずれも(12)の CSC に違反するため非文法的となる。

CSC に関しては、今日でもさまざまな議論がなされている。特に、これが統語的制約であるのか意味的制約であるのかという議論がよく見られる。本

章では、CSC についてこれまでどのような議論がなされてきたのかを踏まえ、CSC について統語的にどのような帰結が得られるのか、またどのような構造であればこれをうまく捉えられるのかを検証していく。

4.2. 標準的な CSC 違反の例

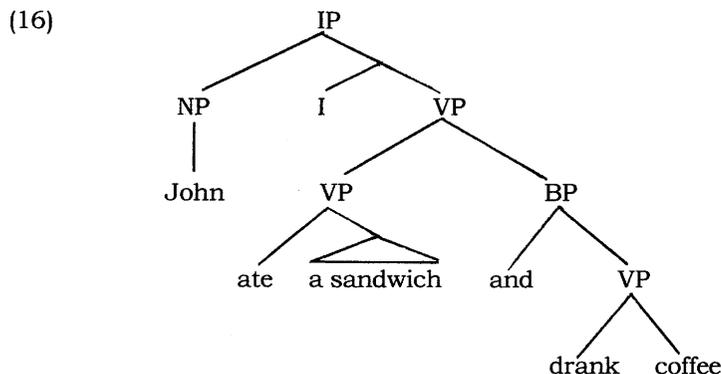
以下の(14)のような文は、標準的な CSC 違反となる文であるが、この構造は Munn の分析をとると、付加詞ではない部分（第 1 等位項）から要素を抜き出しているため文法的であることを予測してしまう。このため彼に基づく構造では、統語的制約としての CSC によって(14)を排除することができない。⁶

(14) *What did John eat t and drink coffee?

そこで、意味的観点から(14)を捉えてみると、「何かを食べる」ということと「コーヒーを飲む」ということは意味的な平行性をなしている。3.1.節で触れた(7)の意味的な平行性の制約を導入すると、これが保たれている限り等位項の抜き出し、及び等位項からの抜き出しが不可能になる、と考えることができる。

例えば、Munn によれば(15)の構造は(16)のように示される。

(15) John ate a sandwich and drank coffee.



このように、統語的には付加構造をとるが、2つの等位項の意味内容が平行的であるため、いずれの等位項からも要素を抜き出すことができないことが

説明できる。もしいずれかの等位項から要素を抜き出すならば、抜き出し後の等位項と抜き出しを適用しない等位項との間に共通の意味機能が見られなくなり、このため(14)の非文法性を説明することができる。

4.3. CSC は意味論だけにかかわる制約か

Lakoff (1986)は、CSC が統語的制約であるとすれば、以下の(17a-c)のような文がその反例になるはずだとしている。

(17) a. What did Harry go to the store and buy t? (Lakoff (1986: (1)))

b. How much can you drink t and still stay sober? (ibid.: (2))⁷

c. That's the stuff that the guys in the Caucasus drink t and live to be a hundred. (ibid.: (20a))

彼は等位項間の意味的なつながりに応じて、(17a-c)の型の文をそれぞれ A-scenario、B-scenario、C-scenario と呼んでいる。A-scenario、B-scenario に見られる and はそれぞれ「それから」「にもかかわらず」と解され、C-scenario では and によって因果関係が示されている。ここで彼は、結論として「CSC は純粹に統語的な制約としては成り立たない」、すなわち意味論的考察が CSC にかかわってくる、と結論づけている。(17)の各文における and は、意味的に平行的であることを示す用法ではなく、そのような等位項からの要素の抜き出しは、(7)の意味的な平行性の制約がそもそも適用されないから容認される、ということになるが、それだけでは、事実として A-scenario では第 2 等位項からのみ要素が抜き出され、B-scenario や C-scenario では第 1 等位項からの抜き出しが可能になることが説明できないため、統語的制約で説明を補う必要が生じる。次節で、Postal (1998)の試みをもとに、scenario の例をどう説明すればよいかを述べていく。

4.4. Postal の分析

Postal (1998)は Lakoff が提唱した scenario の例を取り上げ、意味論の観点で見た場合のその問題点を指摘し、統語的な説明を与えることで、(17a-c)のような文は CSC の反例ではないことを論じている。

4.4.1. B-scenario と C-scenario

まず B-scenario から見ていこう。Postal は、B-scenario に関しては真の等位構造ではなく、要素の抜き出しがない等位項は抜き出しのある等位項の付加詞であるとして、(18a)のように、音形を持たない再述代名詞 ((Non-phonetic) Resumptive Pronoun, RP)を残す場合に限り、第2等位項から要素の抜き出しが可能となる(すなわち第2等位項が(selective) island となる)としている。このため、付加構造をとるという点では、Munn (1993) と合致している。Postal は C-scenario についても同様に付加構造をとると論じている。

- (18) a. the nurse who Mike could be in pain and still not call RP
 (Postal (1998: 80))
- b. How much can you drink t [_{BP}and still stay sober]? [= (17b)]
- c. That's the stuff that the guys in the Caucasus drink t [_{BP}and live to be a hundred]. [= (17c)]

(18b,c)いずれの文も、BP の部分が付加詞(厳密に言えば selective island) であると考えられ、第1等位項からの抜き出しは通例の wh 疑問文形成や関係節形成と同様に考えることができる。

4.4.2. A-scenario

Postal は、A-scenario の場合は付加構造をとるとは述べておらず、B-scenario 及び C-scenario における第2等位項と同様に selective island からの抜き出しであるから CSC の反例とはならない、としている。

では A-scenario はどのような構造をしていると考えられるであろうか。(19a)に見られるように第1等位項からはいかなる要素も抜き出せず、また(19b)のように第2等位項からの抜き出しも容認不可能になる場合があることから、まずいずれの等位項も付加詞になると考えなければならないことが分かる。第2等位項からの抜き出しが容認されるかどうかは、B-scenario 及び C-scenario の第2等位項と同様に、音形を持たない RP の生起が可能かどうかにかかわると考えることができる。したがって A-scenario の第2等位項も selective island であると Postal は記している。

(19) a. ?*[Which store]_i did he go to t_i and buy groceries?

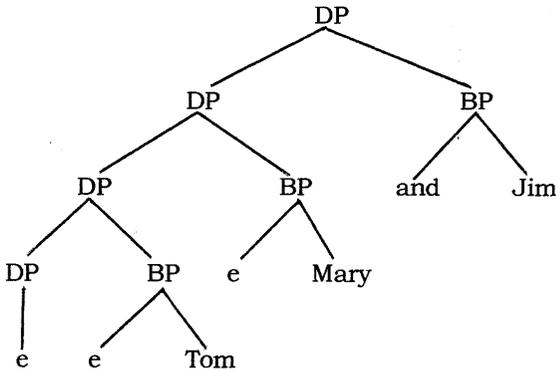
(Postal (1998: 66))

b. *[How many gorillas]_i did he run in and claim there were t_i in the meadow? (ibid.: 69)

よって、A-scenario に関しては、第 1 等位項が *island* で、第 2 等位項が *selective island* になる構造を考えなければならない。しかし、第 1 等位項を主要部だとする Munn の提案によっては、このような構造を想定することができない。そこで Progovac (1996, 1997) の提案を見てみよう。彼女は、等位項はすべて付加詞であり、音形をもたない主要部に等位項が付加していくという構造を提案している。(21)の構造で BP と標示している部分は、彼女は本来 &P と記している。)

(20) Tom, Mary and Jim [= (5a)]

(21)

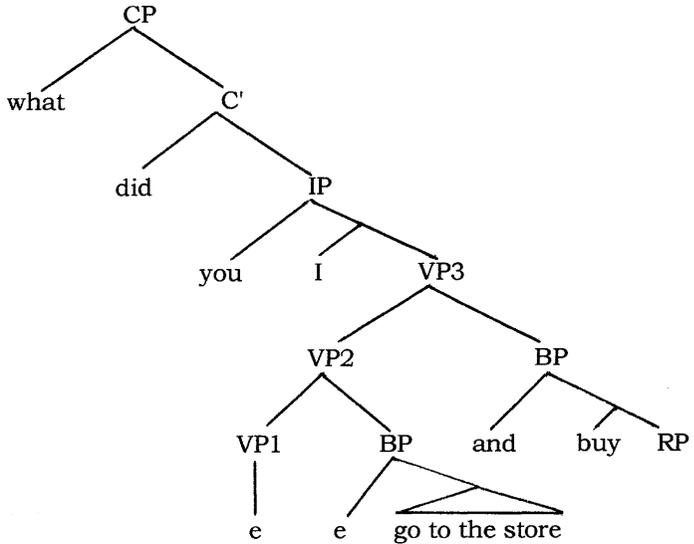


すべての等位項が付加詞であるとする彼女の分析のもとでは、CSC は、付加詞の中のいかなる要素も移動させてはならないとする「付加詞条件 (Adjunct Condition)」という別の条件に帰結することもできる。

先述のように、A-scenario に関しては、第 1 等位項が *island* で、第 2 等位項が *selective island* になる構造を規定しなければならない。Progovac の構造に基づいて(22)の構造を記すと(23)のようになる。

(22) What did Harry go to the store and buy t? [= (17a)]

(23)



これを見ると、要素の抜き出しが容認されるかどうかは、BP の埋め込みの深さが異なることに関係していると考えることができる。これは(24)-(25)の例における寄生空所(parasitic gap)と同様の考察に基づくものである。等位構造ではない(24a)は文法的であるが、A-scenario にした(24b)は構造上埋め込みがより深くなるため非文法的となる。また(25)の非文法性は、before leaving を付加することで without reading e の埋め込みがより深くなることで説明することができる。

(24) a. It was Jane who_i he hired t_i after visiting e_i.

b. *It was Jane who_i he hired t_i after jumping in the car, driving 300 miles, and visitng e_i. (Postal (1998: 69))

(25) *[Which article]_i did you file t_i before leaving without reading e_i?

(大庭 (1998: 197))

(24)-(25)の事例から、構造上より深く埋め込まれていくにつれ、要素の抜き出しの容認可能性が低下していくと考えれば、第2等位項からの抜き出しが可能になり、第1等位項からは不可能になることをうまく説明することができる。

4.5. まとめ

これまでの議論から、CSC は純粋な統語論の制約であるとは言えないことが分かった。つまり、まず意味論の観点で等位構造を捉え、それを統語論で補助してやるという過程が必要になってくるのである。この過程は以下の(26)にまとめることができる。

- (26) i. 2つの等位項が意味的に平行的であれば、いかなる場合においても等位項(から)の抜き出しは認められない。
- ii. 2つの等位項が A-scenario の関係になっていれば、selective island である第2等位項からしか要素を抜き出せない。
- iii. 2つの等位項が B-または C-scenario の関係になっていれば、selective island である第2等位項から要素を抜き出すには制限がかかる。

5. 結び

本稿では、異なる範疇の等位接続や ϕ 素性の一致、また外置の事実をどのように説明するかを考察したうえで、等位接続の統語構造を規定し、等位構造制約に関してどのような帰結が得られるかを論じてきた。結果として、一見同一の等位接続のようであっても、構造としては様々な形になるということが分かる。これらに代表されるあらゆる事例を完全に説明できる構造が、望ましい等位接続の構造であるということになる。

註

- 1 (1)の樹形図は長谷川ほか(2000: 301)による。但し、同書において等位構造についての解説は梶田幸栄氏が担当している。
- 2 MPでは2つの要素を結合して新しい要素を作り出す Merge という操作に基づいて構造を構築するため、必然的に3つ以上の枝分かれができる構造は排除される。
- 3 このほか、Collins (1988a,b)のように Conjunction Phrase の指定部に繰り返し Conjunction Phrase が生起する構造や、Progovac (1996, 1997)のようにすべての等位項を付加詞(adjunct)だとする構造も提唱されている。Progovac の分析の詳細については4.4.2.節を参照。

- 4 江口 (2001)は、Grosu (1985)の提示する「等位項は語用論的に含意される共通のメッセージに同種の貢献をしていなければならない」という語用論的制約に言及し、これが語用論的に同一の機能をもつ「周辺的な」等位構造に適用されることを提案している。しかし、本稿は等位接続の統語構造を規定することに主眼を置いているため、異なる範疇の等位接続を生成する際にかかる制約が意味的なものか語用論的なものかという議論は行わないことにする。
- 5 (12)の前半部分「等位項そのものを抜き出してはならない」というのを、Postal (1998)は「等位項制約(Conjunct Constraint)」と呼んでいる。
- 6 Munn (1993)は、Adjoined BP structure を想定している以上統語的制約として CSC は存在し得ない、と述べている。
- 7 (17b)のような例は、Goldsmith (1985)で最初に論じられている。彼も統語的には付加構造を取るものと考えている。

参考文献

- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*. Mouton, Hague.
- Collins, Chris (1988a) Part 1. "Conjunction Adverbs." Manuscript, MIT.
- Collins, Chris (1988b) Part 2. "Alternative Analyses of Conjunction." Manuscript, MIT.
- 江口巧 (2001) 「英語の等位接続に対する制約—等位項に共通する特性—」『言語科学』第 36 号, 61-72, 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.
- Goldsmith, John (1985) "A Principled Exception to the Coordinate Structure Constraint." *CLS* 21.1., 133-143.
- Grosu, A. (1985) "Subcategorization and Parallelism." *Theoretical Linguistics* 12, 231-239.
- 長谷川欣佑, 河西良治, 梶田幸栄, 長谷川宏, 今西典子 (2000) 『現代の英文法 第 4 巻 文 I』研究社, 東京.
- 稲田俊明 (1988) 「異なる範疇の等位接続(1)-(2)」『英語教育』第 37 巻, 11-12 月号.
- Johannessen, Janne Bondi (1998) *Coordination*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George (1986) "Frame Semantic Control of the Coordinate Structure

Constraint." *CLS* 22.2., 152-167.

Munn, Alan (1993) "Topics in the Syntax and Semantics of Coordinate Structure." Doctoral dissertation, University of Maryland.

中村捷, 金子義明, 菊地朗 (2001) 『生成文法の新展開—ミニマリスト・プログラム—』
研究社, 東京.

大庭幸男 (1998) 『英語構文研究—素性とその照合を中心に—』英宝社, 東京.

Postal, Paul M. (1998) *Three Investigations of Extraction*. Cambridge,
Massachusetts: MIT P.

Progovac, Ljiljana (1996) "(And) Coordination, and Coordination." Paper
presented at the LSA Annual Meeting, San Diego.

Progovac, Ljiljana (1997) "Slavic and the Structure for Coordination." In
Martina Lindseth and Steven Franks, (eds.), *Proceedings of 1996 Formal
Approaches to Slavic Linguistics (FASL)*. Ann Arbor: Michigan Slavic
Publications.

Progovac, Ljiljana (1998) "Structure for Coordination." *Glott International*,
Volume 3, Issue 7-8.

Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive
Grammar of the English Language*. Longman, London.

Ross, John Robert (1986) *Infinite Syntax!* Norwood, N.J.